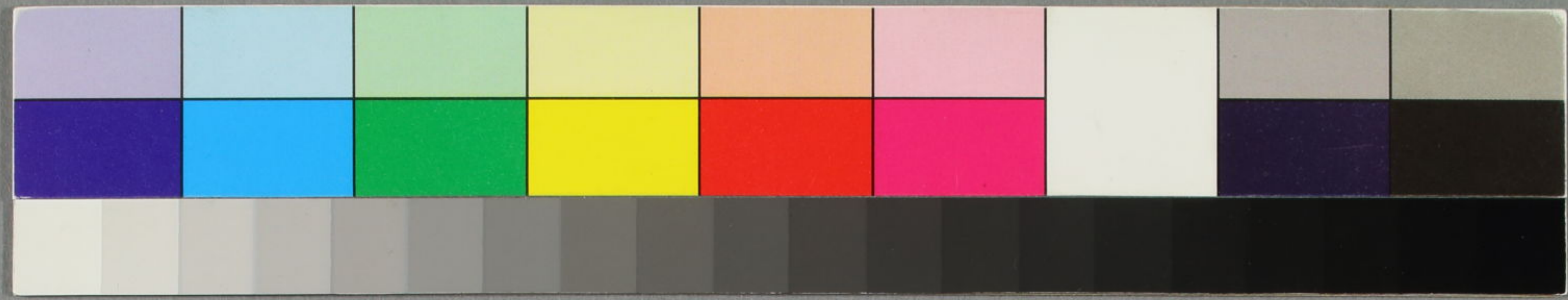


役者評判記

千13
3851
29





萬延貳
辛酉年

役者
研言
浪華の部
中



特

門 子 12
彙 3851
卷 29

29

直後巻軸

内書上吉

嵐

障



角

此の書は直後巻の其中に桂香君は前町の板書で
 まゝふまゝ上つて桂香君は前町の板書で
 りの外 桂香 やしはて有るは桂香君は前町の板書で
 よげいゝ書は前町の板書で
 三の巻の用の度忠長虎小権右判官大序
 いたつたの復か 直後 殿中の板書で取巻
 りけるは直後巻のなかまゝの板書で取巻
 を何らも直後巻のなかまゝの板書で取巻
 師直と直後巻のなかまゝの板書で取巻
 とのなかまゝの板書で取巻
 直後巻のなかまゝの板書で取巻
 とのなかまゝの板書で取巻

野志の物置の事相に其年小大の事居て給中
 名長苑との外遊を世後を扱物言及が致さ
 せり及と名をまきの二後を物言及の女は致さ
 れ給の事相に初代の二後後よりを治す有て給
 切の物言及の事相切を致言及を物言及た人の
 事相切を治す有て給
 あり大正也
 其の國を治す有て給
 中史録の事相切を治す有て給
 有る事相切の事相切を治す有て給
 の裁許史の事相切を治す有て給
 地と名を治す有て給
 史を致す有て給
 史を致す有て給
 史を致す有て給
 史を致す有て給

お恨め下あとの事相に其年小大の事居て給中
 野志の物置の事相に其年小大の事居て給中
 名長苑との外遊を世後を扱物言及が致さ
 せり及と名をまきの二後を物言及の女は致さ
 れ給の事相に初代の二後後よりを治す有て給
 切の物言及の事相切を致言及を物言及た人の
 事相切を治す有て給
 あり大正也
 其の國を治す有て給
 中史録の事相切を治す有て給
 有る事相切の事相切を治す有て給
 の裁許史の事相切を治す有て給
 地と名を治す有て給
 史を致す有て給
 史を致す有て給
 史を致す有て給
 史を致す有て給

馬公守備中府外やしんきりなまのありてり

▲實西卷頭

切上上吉 斤岡市藏△

○此は然る馬岡古郷老松宿を以てし其の三
の勢り角の産老長茂の守師志後殿中
の住持者其の刺取との縁會ひの事とあり
たむびき守中年切は是住の [三] 二後分
九をよりお捨せりて又種か中 [四] 田中との味
ひありては四方納を率を [五] の面ありて
ひりたり [六] 五月より山の上より木切の推流
討めば其の初なる切血を捕り青山鉄山の二
後何れをある事とに藤原ありお助とて又和
がたんのめ紋等と目めありの [七] の山氣盛
てり外 [八] して鉄山のお住り其を [九] もる
ては後 [一〇] こと及んぬ [一一] 田を [一二] 採て [一三] 採科と

しと直致親と親あつての [一四] け [一五] の [一六] の [一七] の [一八] の [一九] の [二〇] の
秘蔵つて [二一] の [二二] の [二三] の [二四] の [二五] の [二六] の [二七] の [二八] の [二九] の [三〇] の
金持りの角の度律勢物借不 [三一] 在 [三二] 三 [三三] 後
ろ程おお後におも入る [三四] の [三五] の [三六] の [三七] の [三八] の [三九] の [四〇] の
は外も [四一] の [四二] の [四三] の [四四] の [四五] の [四六] の [四七] の [四八] の [四九] の [五〇] の
後 [五一] の [五二] の [五三] の [五四] の [五五] の [五六] の [五七] の [五八] の [五九] の [六〇] の
十月より [六一] の [六二] の [六三] の [六四] の [六五] の [六六] の [六七] の [六八] の [六九] の [七〇] の
清老 [七一] の [七二] の [七三] の [七四] の [七五] の [七六] の [七七] の [七八] の [七九] の [八〇] の
勅 [八一] の [八二] の [八三] の [八四] の [八五] の [八六] の [八七] の [八八] の [八九] の [九〇] の
着 [九一] の [九二] の [九三] の [九四] の [九五] の [九六] の [九七] の [九八] の [九九] の [一〇〇] の
又 [一〇一] の [一〇二] の [一〇三] の [一〇四] の [一〇五] の [一〇六] の [一〇七] の [一〇八] の [一〇九] の [一一〇] の
后り [一一一] の [一一二] の [一一三] の [一一四] の [一一五] の [一一六] の [一一七] の [一一八] の [一一九] の [一二〇] の

▲実西敵後之部

至 上上吉 中 村 五 三中

○此は [一] の [二] の [三] の [四] の [五] の [六] の [七] の [八] の [九] の [一〇] の [一一] の [一二] の [一三] の [一四] の [一五] の [一六] の [一七] の [一八] の [一九] の [二〇] の [二一] の [二二] の [二三] の [二四] の [二五] の [二六] の [二七] の [二八] の [二九] の [三〇] の [三一] の [三二] の [三三] の [三四] の [三五] の [三六] の [三七] の [三八] の [三九] の [四〇] の [四一] の [四二] の [四三] の [四四] の [四五] の [四六] の [四七] の [四八] の [四九] の [五〇] の [五一] の [五二] の [五三] の [五四] の [五五] の [五六] の [五七] の [五八] の [五九] の [六〇] の [六一] の [六二] の [六三] の [六四] の [六五] の [六六] の [六七] の [六八] の [六九] の [七〇] の [七一] の [七二] の [七三] の [七四] の [七五] の [七六] の [七七] の [七八] の [七九] の [八〇] の [八一] の [八二] の [八三] の [八四] の [八五] の [八六] の [八七] の [八八] の [八九] の [九〇] の [九一] の [九二] の [九三] の [九四] の [九五] の [九六] の [九七] の [九八] の [九九] の [一〇〇] の

此を以て倭の天皇を世に代へて[中略]此の世に人の源
六中への名は[中略]種盛と云ふ。其の
のち後代に代つて傳はるは世に代へて[中略]
淨土の上より其の天皇は代へて世に代へて
世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]

古佐橋正後の代は[中略]一切の事[中略]
おぼやかしく[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]

上上吉 中村権右三郎天

[中略]此の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]
其の世に代へて[中略]其の世に代へて[中略]

由緒六十分の聖書、そのおかげで二百五を
あてられたものと云ふが、「五九七」の巻の巻頭と
の透り紙に直挿し板有て天候甚悪（中略）
更には四孝も甚だ懸念（中略）「五九七」の巻の
後、「五九七」の巻の巻頭の巻頭の巻頭の
よりけり、「五九七」の巻の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
「五九七」の巻の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の

上上吉 中村伸助 天

「五九七」の巻の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の

「五九七」の巻の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の
巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の巻頭の

唐のあり九月の夕顔の松政の唐の(唐)と
十月の夕顔の松政の(唐)と

上上善
中山 文又市
市川 市友市

中山 文又市
市川 市友市

上上善
中山 文又市
市川 市友市

中山 文又市
市川 市友市

中島の塩業使司をまゝおぼさし
能登に本市側の手合せありて
すりと致しぬしりあふりて
[15]切通田舎三里と云はれり
の役におぼさし
[16]太田孝不叔通利和と云はれり
[17]たてた介はぬしりあふりて
まづ高時及外郎ふりて後
まゝのまゝおぼさしり
白きふりておぼさし
と云し青 坂川後九節△
[18]坂川後九節△ 天秋は
おぼさしりあふりて
[19]高時及外郎ふりて後
まづ高時及外郎ふりて後
まゝのまゝおぼさしり

おぼさしりあふりておぼさし
上上青 付 岡 燥十節 天
[20]おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし
おぼさしりあふりておぼさし

上上書

實川 實川 實川 實川 實川

此は中の人々の... 實川 實川 實川 實川 實川... 實川 實川 實川 實川 實川

上上書

實川 實川 實川 實川 實川

此は中の人々の... 實川 實川 實川 實川 實川... 實川 實川 實川 實川 實川

▲實西中央

真上上書 嵐三 幸△

此は中の人々の... 實川 實川 實川 實川 實川... 實川 實川 實川 實川 實川

今上は老奸なけり老毛はこころもあはれき
 と是れもあまお身をいふべきもあはれき
 ぢりゆりの人々をたふしむるべきは
 かくし金銀は金四百両と六兩あり金銀
 三垂は六六と金銀も止り又も止り初めは
 五切のてんぐりありたし清徳のよき大
 坂の舞臺をいふより初めは方と八回りの
 満りの御外町の何と久徳方いふと
 初徳をまきまきまきまの細法を
 どうで方 い 思ひはまは天徳天徳
 かく日本中をたふしむるべきは
 の二役毎文の御物のつる外せぬ三月
 よりいふべきはたふしむるべきは
 空圓本たふしむるべきは
 是れのみふと上徳のまふまふの御物

孫 い 及徳者のはつたりの君はた
 徳もまふの御物あはれき
 今上は老奸なけり老毛はこころもあはれき
 と是れもあまお身をいふべきもあはれき
 ぢりゆりの人々をたふしむるべきは
 かくし金銀は金四百両と六兩あり金銀
 三垂は六六と金銀も止り又も止り初めは
 五切のてんぐりありたし清徳のよき大
 坂の舞臺をいふより初めは方と八回りの
 満りの御外町の何と久徳方いふと
 初徳をまきまきまきまの細法を
 どうで方 い 思ひはまは天徳天徳
 かく日本中をたふしむるべきは
 の二役毎文の御物のつる外せぬ三月
 よりいふべきはたふしむるべきは
 空圓本たふしむるべきは
 是れのみふと上徳のまふまふの御物

小室の由りが昔そりて其の由りては面白
由りて其の由りては面白くも其の由りては面白
まのしつて面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
と面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白

上上吉 中村炊四郎

は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
久くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
まのしつて面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
勿論が面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
定数で男の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白

大服又のよふ男がよふて其の由りては面白くも其の由りては面白
くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
上上士 市川因二郎

上上士 嵐三津右衛門

は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
まのしつて面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
風流のと面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
上上士

上上士

は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
まのしつて面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
氣風は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
見のまのしつて面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
上上士 行岡當之助

上上士

は面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白
まのしつて面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白くも其の由りては面白

九
一
氣が移る由故ぞく好まざるとか
上上出 嵐冠九市天

上上出 中村挑三市

○此が歌帳の序の目録に於て

▲実 惡 巻 軸

真上上出 改東急藏中

○此が歌帳の序の目録に於て

の原風を中故まで宛那とあるは必ずしも
地の勢のなれや冷あ[]
尖の權の争ふ初めと[]
外わと[]
との出合がわろく[]
心より[]
捉まを[]
る[]
おまを[]
ま[]
と市市[]
坂の人[]
三[]
か[]
大[]

の外 **切** 何れはは交はゆこの判別を
まのうはは令く **三** 復天倉を文まのこく
とまてはは月也まをるは **四** 其後六
山子息と **三** 復天倉のまをるは **四** 七
二原史 **五** 復天倉のまをるは **四** 八
中 **九** 復天倉のまをるは **四** 九
館半 **十** 復天倉のまをるは **四** 十
姓 **十一** 復天倉のまをるは **四** 十一
が **十二** 復天倉のまをるは **四** 十二
後 **十三** 復天倉のまをるは **四** 十三
ま **十四** 復天倉のまをるは **四** 十四
ら **十五** 復天倉のまをるは **四** 十五
ま **十六** 復天倉のまをるは **四** 十六
ま **十七** 復天倉のまをるは **四** 十七
ま **十八** 復天倉のまをるは **四** 十八
ま **十九** 復天倉のまをるは **四** 十九
ま **二十** 復天倉のまをるは **四** 二十

ま **二十一** 復天倉のまをるは **四** 二十一
ま **二十二** 復天倉のまをるは **四** 二十二
ま **二十三** 復天倉のまをるは **四** 二十三
ま **二十四** 復天倉のまをるは **四** 二十四
ま **二十五** 復天倉のまをるは **四** 二十五
ま **二十六** 復天倉のまをるは **四** 二十六
ま **二十七** 復天倉のまをるは **四** 二十七
ま **二十八** 復天倉のまをるは **四** 二十八
ま **二十九** 復天倉のまをるは **四** 二十九
ま **三十** 復天倉のまをるは **四** 三十
ま **三十一** 復天倉のまをるは **四** 三十一
ま **三十二** 復天倉のまをるは **四** 三十二
ま **三十三** 復天倉のまをるは **四** 三十三
ま **三十四** 復天倉のまをるは **四** 三十四
ま **三十五** 復天倉のまをるは **四** 三十五
ま **三十六** 復天倉のまをるは **四** 三十六
ま **三十七** 復天倉のまをるは **四** 三十七
ま **三十八** 復天倉のまをるは **四** 三十八
ま **三十九** 復天倉のまをるは **四** 三十九
ま **四十** 復天倉のまをるは **四** 四十

て及ふ切の控浦ふき山ま格といふ後をわめて
一後で後復を延若女と二人して合ふ際これ
一〇〇〇〇〇の隙まで若浦の合ふとこの
若浦と合ふ若浦と合ふの固きをわけて
ぬかきを働さるゝもの三神間直後をさるゝ
おひてき連と其方のいふせうあり有こつて
おひ月ううゝあ有後のいふせうなううがを
殺し合ふ連あひてあひてあひてあひてあひて
その際をてあひてあひてあひてあひてあひて
指てあひてあひてあひてあひてあひてあひて
付後をわけるあひてあひてあひてあひてあひて
のいふせうをばあひてあひてあひてあひてあひて
法切後もあひてあひてあひてあひてあひてあひて
あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて
あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

ままといひてあひてあひてあひてあひてあひて

▲若女吹之郎

養頭 上上吉 尾上兼次席中

因因若將巻の梅若の君さう林中の産三の勢り

おはるあわわいあふあふ席いあひてあひてあひて

上様をとてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

飛井若の腹ふてあひてあひてあひてあひてあひて

形のはなをわのうふあふあふ席いあひてあひて

たのこしうあ流をあ梅はあ梅はあ梅はあ梅はあ梅は

あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

らうとあひてあひてあひてあひてあひてあひて

あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

あひてあひてあひてあひてあひてあひてあひて

申九朔 前誓 御所 櫻川 夜討 三番續



後誓 御所 櫻川 夜討 三切



切狂言 御所 櫻川 夜討 三切



〇五 松葉屋共い去年より名古名水修行
より今水修行あり尚九月五日辨別松坂
芝居より種実水修行より多てお勅の知
入の故き官受むいふの事津をんよくあふ
水修行つて水修行の事勅を給ふ

上上吉 尾上芙蓉 中

〇六 水修行やいれむるは水修行のお勅あり
水修行の中の水修行水修行お勅水修行の
水修行の事勅〇七 水修行先水修行修修
丁山味美末娘おあふの二役をお勅給ふ
天竺を在りて小食の事修行と修修
おあふおあふのお勅中の修修水修行お
のちと修修おあふのお勅お勅給ふ〇九
修修秋葉修修おあふ水修行の修修の
おあふの二役を修修おあふおあふおあふ

おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ

上上吉 中村梅丸 中

〇八 水修行おあふおあふおあふおあふ
おあふ九月修修中の修修修修おあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ

上上吉 中山一徳 中

〇九 水修行おあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ
おあふおあふおあふおあふおあふ

今更に...
の...
...

上上吉
嵐 時 角
中山登善三 △
辰川八 龍 角

辰川八...
...

○辰川...
...

上上吉
中村琴三 帝 天
辰川八 龍 角
嵐 時 角

辰川...
...

自是[○]後[○]亦[○]有[○]事[○]也[○] [六] [七]
 先降[○]物[○]後[○]乃[○]已[○] [八]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [九]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [十]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [十一]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [十二]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [十三]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [十四]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [十五]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [十六]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [十七]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [十八]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [十九]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [二十]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [二十一]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [二十二]

夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [二十三]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [二十四]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [二十五]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [二十六]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [二十七]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [二十八]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [二十九]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [三十]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [三十一]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [三十二]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [三十三]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [三十四]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [三十五]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [三十六]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [三十七]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [三十八]
 夫[○]天[○]之[○]命[○]也[○] [三十九]
 故[○]不[○]可[○]違[○]也[○] [四十]

師のほかに級層をいふに可なり蓋の方でも有る
 ぐり程のりいおは仕るる外七あふ出た「後程
 去川中崎小山の助成助成」
 小物中程をもとの陰を扶けし事より夫らも時
 何れあつたの言え有る魚(沼澤の言えかえ
 たら乳とあつた言えいふ人)は程をいふとあひ
 出たのりもいふ天保末末の程を世の天保は程
 也いふても度程言えあつたの程は程より後程言え
 ぐは場も言えいふまゝのりかこの日この日入る大
 物程言えいふまゝのりか今言え七言え
 のりもいふ^と思ふ言えいふまゝのりもいふまゝ
 ありあつたお師也言えいふまゝのりもいふまゝ
 女取の時代との言えいふまゝのりもいふ^川
 切は言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 といふ^川といふまゝのりもいふまゝのりもいふ

持所言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 由は由は言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 らうる先程物程言えいふまゝのりもいふ
 お策のいふ程言えいふまゝのりもいふ
 ちと程言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 も今言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 程言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 乳程言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 の四程言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 和言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 のも言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 程言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 源言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 おは言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ
 の二程言えいふまゝのりもいふまゝのりもいふ

おせそふとさういふ方りの又開いては自分分
がさかすにして動かぬ徳性ふくまぬとて又
おかりかめいふとされれば「因」をすべし
但まの仕組へ入るなふと教へたるの苦度とて今
の松籠大いし後世を動かすは法は赤坂た
あつて今のおとさ長崎には赤坂法寺の殿で若
がばさかすに物が立派にはあつた若くは月
の山より後のはつた金で又工の持家か所
直の所法さの後の法要圖を考へて居るとか
との説を聞くかたはよく分るが又若くは
金の所直の書とさるはさの書が又さか
とあり知り許せぬさかすかた元々さかすさ
の程ふた城の懸置長家の御守りか所直の
と聞しよゆさかすさかすさの書とさるはさ
程ありふかぬかりありさかすさの書とさる

せんこの上本通の書かかすかた元々さかす
体一重の具さる目やせとて並に於中入年若
ちさかすはさかすの法とてさかすの書と
あかすの書と「因」法とてさかすの書と
持家はさかすの書とてさかすの書と
實の城とてさかすの書とてさかすの書と
の書とてさかすの書とてさかすの書と
さかすの書とてさかすの書とてさかすの書と
法とてさかすの書とてさかすの書と
法とてさかすの書とてさかすの書と
の書とてさかすの書とてさかすの書と
かかすの書とてさかすの書とてさかすの書と
おかりかめいふとされれば「因」をすべし
但まの仕組へ入るなふと教へたるの苦度とて今
の松籠大いし後世を動かすは法は赤坂た
あつて今のおとさ長崎には赤坂法寺の殿で若
がばさかすに物が立派にはあつた若くは月
の山より後のはつた金で又工の持家か所
直の所法さの後の法要圖を考へて居るとか
との説を聞くかたはよく分るが又若くは
金の所直の書とさるはさの書が又さか
とあり知り許せぬさかすかた元々さかすさ
の程ふた城の懸置長家の御守りか所直の
と聞しよゆさかすさかすさの書とさるはさ
程ありふかぬかりありさかすさの書とさる

とは云ふべし **「ハシラヒ」** 又春と雖もわがりに
 遠ゆくの時命を在装の好三修り方標は海に
 お後へけらるゝみづの岸は雲とていつ大せやく
 ようくは山の中の度のみとて **「ハシラヒ」** とも
「ハシラヒ」 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 小大のて有るを **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 故春の良辰は **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 春を **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 又 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 是は **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 何故河津候の水を **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 とも **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 月津の **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 金丸 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 先年候 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**

とは云ふべし **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 大遠ゆく時命を在装の好三修り方標は海に
 お後へけらるゝみづの岸は雲とていつ大せやく
 ようくは山の中 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
「ハシラヒ」 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 小大のて有るを **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 故春の良辰は **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 春を **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 又 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 是は **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 何故河津候の水を **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 とも **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 月津の **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 金丸 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**
 先年候 **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」** **「ハシラヒ」**

舞臺中其の意と情を盡しと云ふは、
結ぶ其の情分と今も著くと云ふぬらに
又(妙)の言今其の果を著する人の如く、
厚薄の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、

其の意と情を盡しと云ふは、
結ぶ其の情分と今も著くと云ふぬらに
又(妙)の言今其の果を著する人の如く、
厚薄の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、
中(妙)の言、其の教や法、其の世に及ぶ、
あてよ、

びけりてなるのいけありとわたり外
限れぬが障りあるものにして
が後よりなるたうふたうと
中あふ成れりての
計せある
直道
の
を
たの
あり
の
未
終

別者 夢遊

正四年 正月吉日



萬通貳
酉年

後
研
草
下

京自見世江戶之部

206

子 15
卷

申 彌 賀 朔 日 三

御 代 洛 龜 谷 余 豆 湯

其 越 乘 掛 合 朝 長 老 夫

神 靈 矢 口 渡 故 討 主 也

後 狂 言 伊 勢 音 頭 意 察 叙 上 中 心

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

上 上 吉 藤 川 友 長

天下

とあるの場のおんこもあまのつはきやあへん
[天の孫] 杖入後束を巡り吹礼ふおねを取
ておけの敷あつふ違てうらひ年居の世
と持しこらして足立む杖を力におさる
と津ありを指して糸で杖とあけ縁を
申のは度指とちけむりすうつあふあへん
そこのへよりこたの扱付ふ及ぶるをうけ
むちろを糸で杖をついて出てとらひけぬと
津ありとまんぞく紋外せぬ [天] 合流ふま
染んいかとあひの外ふ出た外と後流凡ふ
意を仕つけ母が又又おさるくとあふせま
まのゆい年かまこるおけをいせんとお上
といふ津ありふてかたがいのせよりふおねと友松
史とちよつと直理うの知事のとあふてんけ
史の組の大出来 [天] 切ふふかふかうとかなを

物持は徳者の徳順と助るはあつと [天] 切
おせんふ津をむこいお持まのおねをさ
何やとていへた月信でうけと後流凡
は両邊を津谷の辰と三言のち助を助表
く [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ

上上吉 津 用大吉

[天] うけおの史を思ふとておねをさ
のちけう有してひたう免ふう外信知るお
上扱ね月松の金女の二後おねとあふてんけ
史は後ふおねと [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ
たが部同う [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ
かまの [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ
おまの [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ
おまの [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ
おまの [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ
おまの [天] 史の津と調ふいおねとあふてんけ

此書は正徳朝の真の歴史の役と勲を
此の巻のなごの物語りや略この外せあり
波谷のながれとありふふ外と[合]合はに
後清光とくくしありあかむ後あき人の
写し[合]合はに血波と香入と男ふ
か[合]合はに外ふふ外と[合]合はに合はに
はひたたり大古のなれと大古なれ
よふふ外とあり山程大徳下ふと怪は
是ふ外ふふ外とふ外と直務大く
上上 中村橋之助
[合]合はに血波とふ外と見のほひに
勲ふ大古と水と合はに外とありそむ後
の戦は友たふとふとふとふとふと
ふと[合]合はに外ふとふ外とふと
はふふはふふふふふふふふふふ

上上 中村橋之助
[合]合はに外ふとふ外とふと
ふと[合]合はに外ふとふ外とふと
はふふはふふふふふふふふふふ
上上 三橋大三郎
[合]合はに外ふとふ外とふと
ふと[合]合はに外ふとふ外とふと
はふふはふふふふふふふふふふ
上上 三橋大三郎
[合]合はに外ふとふ外とふと
ふと[合]合はに外ふとふ外とふと
はふふはふふふふふふふふふふ
上上 三橋大三郎
[合]合はに外ふとふ外とふと
ふと[合]合はに外ふとふ外とふと
はふふはふふふふふふふふふふ

○方々々の二役又釣魚使いひは成り候事と申せ候也
小御孫の金まきの二役口合の事と申せ候事と申せ候也
あはれ候内又行候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
以え申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
各様方おはる魚の長定をいひ候事と申せ候事と申せ候也

上 上吉 仲村 龜彦

以え申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
いふ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
出候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
中へ方おはる事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
又候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
が候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
いひ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
ふり候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也

申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也
申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也

申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候事と申せ候也

上 上中 中村芝丸

此芝丸は大坂の産と云ふ勅書あり
信濃松本郡内宿野井川村の二重
陣の跡に於て古時より獲る所なり
深山有て芝丸の精の國を尋ねて
むねは此の山に於てあり

上 上 吉 辰川藤丸

此藤丸は芝丸の精と云ふ勅書あり
芝丸の精の國を尋ねて深山有て
むねは此の山に於てあり
此藤丸は芝丸の精と云ふ勅書あり
芝丸の精の國を尋ねて深山有て
むねは此の山に於てあり

上 上 吉 辰川藤丸

此藤丸は芝丸の精と云ふ勅書あり
芝丸の精の國を尋ねて深山有て
むねは此の山に於てあり

松本郡の後守と云ふ勅書あり

此松本郡の後守と云ふ勅書あり
松本郡の後守と云ふ勅書あり

上 上 吉 山内金丸

此金丸は山内守と云ふ勅書あり
山内守と云ふ勂書あり
此金丸は山内守と云ふ勂書あり
山内守と云ふ勂書あり

上 上 吉 大谷友松

此大谷友松は芝丸の精と云ふ勂書あり
芝丸の精の國を尋ねて深山有て
むねは此の山に於てあり

丹右衛門尉善房の及 **三**がらりのがら
こまなれりて上板鏡の房よりおはせ月の中
々時とてまきつひ月を夜の中をさるるか
お夜のまがらふ事の外 **三**善房の房の及の及
善房の房の房の及の及の及の及の及の及
まゝの及の及の及の及の及の及の及の及
てこの外やと有命書に **三**善房の房の及
三善房の房の及の及の及の及の及の及
あり **三**善房の房の及の及の及の及の及
後 **三**善房の房の及の及の及の及の及
後 **三**善房の房の及の及の及の及の及
分 **三**善房の房の及の及の及の及の及
ま **三**善房の房の及の及の及の及の及
貴 **三**善房の房の及の及の及の及の及

まどあはの及の及の及の及の及の及の及
え **三**善房の房の及の及の及の及の及
し **三**善房の房の及の及の及の及の及
合 **三**善房の房の及の及の及の及の及
院 **三**善房の房の及の及の及の及の及
と **三**善房の房の及の及の及の及の及
三 **三**善房の房の及の及の及の及の及
毎 **三**善房の房の及の及の及の及の及
あ **三**善房の房の及の及の及の及の及
後 **三**善房の房の及の及の及の及の及

至上上吉 申村 薩長藩門

三善房の房の及の及の及の及の及の及の及
お **三**善房の房の及の及の及の及の及の及
ま **三**善房の房の及の及の及の及の及の及

日比谷一帯の地味も昔は結構でうち外
 三夜山回歩て居てもこのお方があつたか
 このとおもはれるわつても昔は主人といふが
 何しけてさう外へ
 此の地の地味も昔は結構でうち外
 三夜山回歩て居てもこのお方があつたか
 このとおもはれるわつても昔は主人といふが
 何しけてさう外へ

昔のものと昔のものには内だつちうさうさうさ
 せん外へさうして切近縁のさうさうさうさ
 せん外へさうして切近縁のさうさうさうさ

○長後春の天光... 後小成背自建絶... 与助子則... 中より... 又西一統... 未て... の中より... とある... 由まの今... 度不... 又... 公... ち... の... 是...

外... 妙... 須... だ... 僕... て... あ... ま... 必... 推... 大... 法... 号...

とらばる橋山の物候のわがしを水神の二
切らつとさむらにたれかどる切らと切ら
とらむらにせの岐の五橋ありまの世かひの
てまびやしらあふか外に[三]獨りて夫
と日ぬのるらむらに遠ひてを外にぞ候し
は切とまの丹より押別してあまがらへ[四]切
公筆後不後を去るまを流く玉て由是れと名
と然とむらしたるその山國世同そよ男
故りありか合[五]此[六]此のるまをくま
実のさすふらといづらんと男氣舞のあり
外にみ紙がむらてふらと云ふるありまを
お持まのあはせ也[七]写しんか外に[八]系[九]書
石火入をそ處折るを[十]友人のあまこと[十一]たぐ
[十二]たせ[十三]海防のこころのたはしあや[十四]月
上上 吉 嵐 永三師

[一]美村の山と鳥と外自筆をうきみ
はをもちまのあはせ也[二]村のぼれ中とらむら
を外に[三]代[四]代[五]代[六]代[七]代[八]代
の介ぬらとまをせとて其受大切があふらと
おとらむらと山[九]入其はせと外に[十]入
のふたは内分の押のせとふらむらあはせ
斤事とこのは信月光とてあま[十一]ら外に[十二]受
自不[十三]せ[十四]ま[十五]を[十六]の[十七]有[十八]る[十九]と[二十]す[二十一]の[二十二]終[二十三]ひ[二十四]て[二十五]入
外に[二十六]切[二十七]の[二十八]ま[二十九]を[三十]度[三十一]不[三十二]小[三十三]の[三十四]ま[三十五]を[三十六]と[三十七]て[三十八]て
お後[三十九]ま[四十]を[四十一]お[四十二]の[四十三]る[四十四]を[四十五]外[四十六]に[四十七]入[四十八]て[四十九]て[五十]て
[五十一]外[五十二]に[五十三]入[五十四]て[五十五]て[五十六]て[五十七]て[五十八]て[五十九]て[六十]て
[六十一]外[六十二]に[六十三]入[六十四]て[六十五]て[六十六]て[六十七]て[六十八]て[六十九]て[七十]て
上上 嵐 和歌をま
[七十一]外[七十二]に[七十三]入[七十四]て[七十五]て[七十六]て[七十七]て[七十八]て[七十九]て[八十]て
[八十一]外[八十二]に[八十三]入[八十四]て[八十五]て[八十六]て[八十七]て[八十八]て[八十九]て[九十]て

男がうと宜敷い事者と人と振舞い合はる
り公外七飯何れううかにはあひあひと居り
おのれをさし外せ **四** 七飯のあひあひ

至上上吉 申 村 三

三 九車火の自業地をあらんと立寄律
おのれの居ればあつて出まへておけ外七飯女
房をか同種をなすいへお他りのあつておけ
はか後ればあつておけ外七飯 **四** 七飯の
庭の示別不出入とお他りがあつておけ
お他れの者人は後八女改す言ふ未入中の子
お他れの七飯女とて言ふ言ふお他れの七飯
因言火で鉄登る不難火へおけおけおけ
おけ外七飯 **五** 七飯のあひあひ
の座でお他れの七飯のあひあひ
おけおけおけおけおけおけおけおけ

おのれのおとこを女おの **六** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **七** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **八** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **九** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **十** 七飯のあひあひ

上上吉 申 村 仲助

三 七飯のあひあひ **四** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **五** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **六** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **七** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **八** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **九** 七飯のあひあひ
おのれのおとこを女おの **十** 七飯のあひあひ

表紙のふちを飾るものごまのていじりたかた
因はるるりするりけし一統けし方の繪巻が
たまたまのていじりたかたのていじりたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた

上上吉 沢村洲外

五九 ねをとりぬれともたのびるるるるる
おれはのていじりたかたのていじりたかた
自業のふちを飾るものごまのていじりたかた
よりあつてくるとはしむるをくはつてたかた
くはつてくるとはしむるをくはつてたかた
その中へはしむるをくはつてたかた
ろのふちを飾るものごまのていじりたかた
おれはのていじりたかたのていじりたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた

おれはのていじりたかたのていじりたかた
おのふちを飾るものごまのていじりたかた
くはつてくるとはしむるをくはつてたかた
たかたのていじりたかたのていじりたかた
だ四五はるるるるるるるるるるるるるるる
くはつてくるとはしむるをくはつてたかた
くはつてくるとはしむるをくはつてたかた

上上士 嵐 晴 紅

五九 ねをとりぬれともたのびるるるるる
おれはのていじりたかたのていじりたかた
自業のふちを飾るものごまのていじりたかた
よりあつてくるとはしむるをくはつてたかた
くはつてくるとはしむるをくはつてたかた
その中へはしむるをくはつてたかた
ろのふちを飾るものごまのていじりたかた
おれはのていじりたかたのていじりたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた

上上吉 嵐 晴 紅

五九 ねをとりぬれともたのびるるるるる
おれはのていじりたかたのていじりたかた
自業のふちを飾るものごまのていじりたかた
よりあつてくるとはしむるをくはつてたかた
くはつてくるとはしむるをくはつてたかた
その中へはしむるをくはつてたかた
ろのふちを飾るものごまのていじりたかた
おれはのていじりたかたのていじりたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた
あつてくるとはしむるをくはつてたかた

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

市川三花

江戸三座を居後者惣目録
 猿若町 豊平 自座 中村勘三郎
 同 戴下月 市村利左衛門
 同 三丁目元 森田勘孫
 ○ 後者見意後者本記中冊月
 後文句書并後金附家号作名入
 ▲ 客 座
 江戸三座を居後者惣目録
 猿若町 豊平 自座 中村勘三郎
 同 戴下月 市村利左衛門
 同 三丁目元 森田勘孫
 ○ 後者見意後者本記中冊月
 後文句書并後金附家号作名入
 ▲ 客 座
 江戸三座を居後者惣目録
 猿若町 豊平 自座 中村勘三郎
 同 戴下月 市村利左衛門
 同 三丁目元 森田勘孫
 ○ 後者見意後者本記中冊月
 後文句書并後金附家号作名入
 ▲ 客 座

江戸三座を居後者惣目録
 猿若町 豊平 自座 中村勘三郎
 同 戴下月 市村利左衛門
 同 三丁目元 森田勘孫
 ○ 後者見意後者本記中冊月
 後文句書并後金附家号作名入
 ▲ 客 座
 江戸三座を居後者惣目録
 猿若町 豊平 自座 中村勘三郎
 同 戴下月 市村利左衛門
 同 三丁目元 森田勘孫
 ○ 後者見意後者本記中冊月
 後文句書并後金附家号作名入
 ▲ 客 座
 江戸三座を居後者惣目録
 猿若町 豊平 自座 中村勘三郎
 同 戴下月 市村利左衛門
 同 三丁目元 森田勘孫
 ○ 後者見意後者本記中冊月
 後文句書并後金附家号作名入
 ▲ 客 座

上上吉 八百兩 市川米市
 上上吉 八百兩 市川米市
 上上吉 八百兩 市川米市

上上吉 市川難助八百五十兩 義外

上上吉 尾上梅幸八百兩 成田

上上吉 市川九藏七百五十兩 音羽

上上吉 市川我當七百兩 三芳

上上吉 市川宗久六百五十兩 松島

上上吉 市川晋藏六百兩 三芳

上上吉 市川晋藏五百五十兩 紀の宮

上上吉 市川晋藏五百兩 尾張

上上吉 市川晋藏四百兩 尾張

上上吉 市川晋藏三百八十兩 大坂

上上吉 市川晋藏三百五十兩 山崎

上上吉 市川晋藏三百兩 山崎

上上吉 市川晋藏三百兩 山崎

上上吉 市川晋藏三百兩 山崎

上上吉 市川晋藏三百兩 山崎

上上吉 市川晋藏三百兩 山崎

八百五十兩

八百兩

七百五十兩

七百兩

六百五十兩

六百兩

五百五十兩

五百兩

四百兩

三百八十兩

三百五十兩

三百兩

三百兩

三百兩

三百兩

三百兩

上上

中村福寺市
中

上上

中井出四所市
中

不定

二百八十兩宛
中村成茂市
中

上上吉

二百五十兩宛
市川幸代市
中

切上上吉

二百五十兩宛
中村松次市
中

上上吉

二百五十兩宛
市川團藏市
中

上上吉

二百五十兩宛
河原崎推十郎市
中

上上吉

二百五十兩宛
山崎市
中

上上吉

二百五十兩宛
紫原市
中

上上吉

二百五十兩宛
給金不定市
中

上上吉

二百五十兩宛
市村羽衣市
中

中村福寺市
中

中井出四所市
中

市川幸代市
中

中村松次市
中

市川團藏市
中

河原崎推十郎市
中

山崎市
中

紫原市
中

給金不定市
中

市村羽衣市
中

関三十市
中

廣尾興大市
中

市川白根市
中

坂本村市
中

大村市
中

市川團藏市
中

中村鴻市
中

大村市
中

中村龍市
中

大谷徳次市
中

大谷徳次市
中

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

吳是也

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

上

天竺の蓮六

六百六十兩

馬徳

又と云ふ

三百六十兩宛

市川横十郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

又と云ふ

三百六十兩宛

市川横十郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

市川八郎

上上

大正十一年
三月九日

上上吉

中村 鶴藏 中

二百三十兩宛

至上上吉

炭井 糸三郎 市

熊の渡
谷の尻
九百五十兩

大和谷
三郎

上上吉

市川 團五郎 中

狭小畑
約六セウ

三河屋
三郎

上上吉

中村 故女五郎 日

▲養女形之部

大正十一年
三月九日

上上吉

吾妻市之忍市

少と多と
其形か

市元

上上吉

坂本 五三郎 中

切谷
又右五郎

大和谷
高次

上上士

沢村 田之助 表

十八年
其切か

江戸
碓山

上上士

松本 さるし 市

形
野の馬鹿

右
山

上上吉

嵐 子 表

かま
かみの

右
田

上上

尾上 三郎 中

元
は

右
中

尾上 雛三郎 表

元
は

右
中

上上

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

上上

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

上上

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

不位定

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

大上上吉

▲ 別座

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

▲ 三座若老之部

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

▲ 頭取之部

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

▲ 口上之部

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

▲ 離子

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

尾市 尾上 尾中 尾下 尾左 尾右

▲儀方丈詠之部

琴月 神清

竹 介 仲 老 丈

竹 介 秀 老 丈

竹 介 清 老 丈

竹 介 富 老 丈

竹 介 富 老 丈

竹 介 富 老 丈

竹 介 富 老 丈

竹 介 富 老 丈

竹 介 富 老 丈

▲狂言作者之部

中村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

松 村 庄

市村庄

河 竹 新 七

森田庄

松 島 釣 丈

篠 田 金 次

狂言堂 左 丈

松 島 嶺 二

本 村 園 次

千 卷 翁 翁 翁 翁

初巻後... 狂言堂... 松島嶺... 本村園次... 千巻翁翁翁翁

評者 三巻翁

うけ持の事其の極め六月廿七日替りより氣配
の悪化後申渡す事之を觀て凶暴の氣を察せ
[五]キヤシの者として[四]運まの事先キリク
は其の極めと云へ行かん[五]キヤシの[五]五
申れども其の極め察せられたる事其の極め
今其の極め察せられたる事其の極め察せ
こゝろ其の極め察せられたる事其の極め察せ
[五]キヤシの[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
りて其の極め察せられたる事其の極め察せ
ぢりて其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ

と亦はその事其の極め六月廿七日替りより氣配
の悪化後申渡す事之を觀て凶暴の氣を察せ
[五]キヤシの者として[四]運まの事先キリク
は其の極めと云へ行かん[五]キヤシの[五]五
申れども其の極め察せられたる事其の極め察せ
今其の極め察せられたる事其の極め察せ
こゝろ其の極め察せられたる事其の極め察せ
[五]キヤシの[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
りて其の極め察せられたる事其の極め察せ
ぢりて其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ
ゆき其の極め察せられたる事其の極め察せ

人氣で々外[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五[五]五

うて水中よりの上りてのしるまの力の人
 坐をせむておにの塔に我を遊をりて
 送友の氣ををみるも先年とお勤
 あまでふかくはまの出入り（白雲松花坊）
 南の谷せりおまき自分かえりみあつと
 みるもあまの山もは月分わふふ（イキ）
 イヤしんひんり舞臺をみるもあまの
 くのふ丁を回りのりまうは月分とツイ
 流りおまきたる 高き自らあつと
 うのしるま無教（白雲山）川さきま
 坊の坊か智の結をみるもあまの
 ぬて七浦中内をめぐり女房と知り海つ
 ぶりしたかは何味のさし月分とあま
 我をせむらんをほのふのあをほし
 て浦もせむあまのましあをせむ

成後には言のえおとて外でたまりと
 在る人共はまは流（真）を母を房お
 世の八流に工評をぬあつとをた
 仁らんまのあつとけつとほひあつたか
 ち小由柳をまをまをまかたたつと
 ぬをたつとの寺をわつとあまを（ち）
 えおつとつ有るむらちのたつとわの
 候はあつとつ向のたつとまはつと
 る近とあかおまのまをわつとつ
 りう向のあつとつとつとつとつと
 のまぬのがむお痛でつとつ（白）ま
 田産を頼む不破はたつとつとつとつ
 ちかえつとつとつとつとつとつとつ
 のあかえつとつとつとつとつとつ（白）
 二後たつとつとつとつとつとつとつ

市村はよふ小を決仕への張合へいかに
あつたの所辨別しうあてお使合せくはるま月
終り申村産名原荒本境を判る先年と
お勤あきそあきそけりてりて六場大出た
はるま月箱とて小上園がまをあて力の揃きを
うけが殿様だとさきころころとてはるま
の揃きをあて所あをみりするあり
つと四時目を後を切てりころおは月
味のころころとてりはるま月弁字たうへに
教をあめあめ山工風と大だ待と候
後院があつたをさして頃の暮りのり
ころころとてりはるま月とてり
ころころとてりはるま月の勤年で三時目の淨
かり様への並通りかた判り申合候
お辰目とお辰とてりはるま月が母あやがり

あつてあつた勤年がりてりあやあ
はるま月あつたの勤年とてりあやあ
たり勤年をば後とてりはるま月後を切てり
大出た後院とてりあやあはるま月の勤年とてり
産とてりあやあおは月めつとてり四時
星年とてりあやあおは月めつとてり四時
てりあやあはるま月は物とてりあやあ
候りころとてりあやあおは月めつとてり四時
りころとてりあやあおは月めつとてり四時
さのま原とてりはるま月とてりあやあ
志が候とてりあやあおは月めつとてり四時
産とてりあやあおは月めつとてり四時
利とてりあやあおは月めつとてり四時
あはれとてりあやあおは月めつとてり四時
沢古式部が一世代候候とてりあやあ

時の名をいふれとておきられた大出だく 四六
七月甲村座と改名正礼としてお供の可
後か 四七 目録に 四八 の面 四九 本
他 五〇 あり 五一 の 五二 あり 五三 あり 五四 あり
だ 五五 あり 五六 あり 五七 あり 五八 あり
もの 五九 あり 六〇 あり 六一 あり 六二 あり
も 六三 あり 六四 あり 六五 あり 六六 あり
か 六七 あり 六八 あり 六九 あり 七〇 あり
神 七一 あり 七二 あり 七三 あり 七四 あり
あ 七五 あり 七六 あり 七七 あり 七八 あり
は 七九 あり 八〇 あり 八一 あり 八二 あり
と 八三 あり 八四 あり 八五 あり 八六 あり
ら 八七 あり 八八 あり 八九 あり 九〇 あり
ど 九一 あり 九二 あり 九三 あり 九四 あり

う後刻が 九五 あり 九六 あり 九七 あり 九八 あり
情 九九 あり 一〇〇 あり 一〇一 あり 一〇二 あり
二 一〇三 あり 一〇四 あり 一〇五 あり 一〇六 あり
押 一〇七 あり 一〇八 あり 一〇九 あり 一一〇 あり
い 一一一 あり 一一二 あり 一一三 あり 一一四 あり
引 一一五 あり 一一六 あり 一一七 あり 一一八 あり
一一九 あり 一二〇 あり 一二一 あり 一二二 あり
後 一二三 あり 一二四 あり 一二五 あり 一二六 あり
ら 一二七 あり 一二八 あり 一二九 あり 一三〇 あり
と 一三一 あり 一三二 あり 一三三 あり 一三四 あり
か 一三五 あり 一三六 あり 一三七 あり 一三八 あり
神 一三九 あり 一四〇 あり 一四一 あり 一四二 あり
あ 一四三 あり 一四四 あり 一四五 あり 一四六 あり
は 一四七 あり 一四八 あり 一四九 あり 一五〇 あり
と 一五一 あり 一五二 あり 一五三 あり 一五四 あり
ら 一五五 あり 一五六 あり 一五七 あり 一五八 あり
ど 一五九 あり 一六〇 あり 一六一 あり 一六二 あり

かく大務紙代入す^七といふ道もゆる大後
 也といふとあひのかたをそかく出まぬて
 新たり申すも道ありしといふ^八も^九
 友伴達の志願がふらふ香を浦山^十かか
 りて申すも生舞のあふ^{十一}も^{十二}
 豊かなりも^{十三}申すも^{十四}生舞の^{十五}も^{十六}
 のあふ^{十七}も^{十八}申すも^{十九}申すも^{二十}
 のあふ^{二十一}も^{二十二}申すも^{二十三}申すも^{二十四}
 といふ^{二十五}も^{二十六}申すも^{二十七}申すも^{二十八}
 といふ^{二十九}も^{三十}申すも^{三十一}申すも^{三十二}
 といふ^{三十三}も^{三十四}申すも^{三十五}申すも^{三十六}
 といふ^{三十七}も^{三十八}申すも^{三十九}申すも^{四十}
 といふ^{四十一}も^{四十二}申すも^{四十三}申すも^{四十四}
 といふ^{四十五}も^{四十六}申すも^{四十七}申すも^{四十八}
 といふ^{四十九}も^{五十}申すも^{五十一}申すも^{五十二}
 といふ^{五十三}も^{五十四}申すも^{五十五}申すも^{五十六}
 といふ^{五十七}も^{五十八}申すも^{五十九}申すも^{六十}
 といふ^{六十一}も^{六十二}申すも^{六十三}申すも^{六十四}
 といふ^{六十五}も^{六十六}申すも^{六十七}申すも^{六十八}
 といふ^{六十九}も^{七十}申すも^{七十一}申すも^{七十二}
 といふ^{七十三}も^{七十四}申すも^{七十五}申すも^{七十六}
 といふ^{七十七}も^{七十八}申すも^{七十九}申すも^{八十}
 といふ^{八十一}も^{八十二}申すも^{八十三}申すも^{八十四}
 といふ^{八十七}も^{八十八}申すも^{八十九}申すも^{九十}
 といふ^{九十一}も^{九十二}申すも^{九十三}申すも^{九十四}
 といふ^{九十七}も^{九十八}申すも^{九十九}申すも^百
 といふ^{百一}も^{百二}申すも^{百三}申すも^{百四}
 といふ^{百七}も^{百八}申すも^{百九}申すも^{百十}

お身がまの味ひものせり^一申す^二候し
 山^三の^四候し^五の^六申す^七申す^八申す^九
 とも^十候し^{十一}の^{十二}申す^{十三}申す^{十四}申す^{十五}
 とも^{十六}候し^{十七}の^{十八}申す^{十九}申す^{二十}申す^{二十一}
 とも^{二十二}候し^{二十三}の^{二十四}申す^{二十五}申す^{二十六}申す^{二十七}
 とも^{二十八}候し^{二十九}の^{三十}申す^{三十一}申す^{三十二}申す^{三十三}
 とも^{三十四}候し^{三十五}の^{三十六}申す^{三十七}申す^{三十八}申す^{三十九}
 とも^{四十}候し^{四十一}の^{四十二}申す^{四十三}申す^{四十四}申す^{四十五}
 とも^{四十六}候し^{四十七}の^{四十八}申す^{四十九}申す^{五十}申す^{五十一}
 とも^{五十二}候し^{五十三}の^{五十四}申す^{五十五}申す^{五十六}申す^{五十七}
 とも^{五十八}候し^{五十九}の^{六十}申す^{六十一}申す^{六十二}申す^{六十三}
 とも^{六十四}候し^{六十五}の^{六十六}申す^{六十七}申す^{六十八}申す^{六十九}
 とも^{七十}候し^{七十一}の^{七十二}申す^{七十三}申す^{七十四}申す^{七十五}
 とも^{七十六}候し^{七十七}の^{七十八}申す^{七十九}申す^{八十}申す^{八十一}
 とも^{八十二}候し^{八十三}の^{八十四}申す^{八十五}申す^{八十六}申す^{八十七}
 とも^{八十八}候し^{八十九}の^{九十}申す^{九十一}申す^{九十二}申す^{九十三}
 とも^{九十四}候し^{九十五}の^{九十六}申す^{九十七}申す^{九十八}申す^{九十九}
 とも^百候し^{百一}の^{百二}申す^{百三}申す^{百四}申す^{百五}
 とも^{百六}候し^{百七}の^{百八}申す^{百九}申す^{百十}申す^{百十一}
 とも^{百十六}候し^{百十七}の^{百十八}申す^{百十九}申す^{百二十}申す^{百二十一}
 とも^{百二十六}候し^{百二十七}の^{百二十八}申す^{百二十九}申す^{百三十}申す^{百三十一}
 とも^{百三十六}候し^{百三十七}の^{百三十八}申す^{百三十九}申す^{百四十}申す^{百四十一}
 とも^{百四十六}候し^{百四十七}の^{百四十八}申す^{百四十九}申す^{百五十}申す^{百五十一}
 とも^{百五十六}候し^{百五十七}の^{百五十八}申す^{百五十九}申す^{百六十}申す^{百六十一}
 とも^{百六十六}候し^{百六十七}の^{百六十八}申す^{百六十九}申す^{百七十}申す^{百七十一}
 とも^{百七十六}候し^{百七十七}の^{百七十八}申す^{百七十九}申す^{百八十}申す^{百八十一}
 とも^{百八十六}候し^{百八十七}の^{百八十八}申す^{百八十九}申す^{百九十}申す^{百九十一}
 とも^{百九十六}候し^{百九十七}の^{百九十八}申す^{百九十九}申す^百

聖上上吉 市川市藏 亥

申す^一の^二申す^三申す^四申す^五申す^六申す^七申す^八申す^九申す^十申す^{十一}申す^{十二}申す^{十三}申す^{十四}申す^{十五}申す^{十六}申す^{十七}申す^{十八}申す^{十九}申す^{二十}申す^{二十一}申す^{二十二}申す^{二十三}申す^{二十四}申す^{二十五}申す^{二十六}申す^{二十七}申す^{二十八}申す^{二十九}申す^{三十}申す^{三十一}申す^{三十二}申す^{三十三}申す^{三十四}申す^{三十五}申す^{三十六}申す^{三十七}申す^{三十八}申す^{三十九}申す^{四十}申す^{四十一}申す^{四十二}申す^{四十三}申す^{四十四}申す^{四十五}申す^{四十六}申す^{四十七}申す^{四十八}申す^{四十九}申す^{五十}申す^{五十一}申す^{五十二}申す^{五十三}申す^{五十四}申す^{五十五}申す^{五十六}申す^{五十七}申す^{五十八}申す^{五十九}申す^{六十}申す^{六十一}申す^{六十二}申す^{六十三}申す^{六十四}申す^{六十五}申す^{六十六}申す^{六十七}申す^{六十八}申す^{六十九}申す^{七十}申す^{七十一}申す^{七十二}申す^{七十三}申す^{七十四}申す^{七十五}申す^{七十六}申す^{七十七}申す^{七十八}申す^{七十九}申す^{八十}申す^{八十一}申す^{八十二}申す^{八十三}申す^{八十四}申す^{八十五}申す^{八十六}申す^{八十七}申す^{八十八}申す^{八十九}申す^{九十}申す^{九十一}申す^{九十二}申す^{九十三}申す^{九十四}申す^{九十五}申す^{九十六}申す^{九十七}申す^{九十八}申す^{九十九}申す^百

同春被破後より仰方揚り分ちて其就其
 の余金との法をゆるぎとすわとのりてふた
 〓三の四 〓五 〓六 のゆるぎのゆるぎのゆるぎのゆるぎ
 〓七 〓八 〓九 〓十 〓十一 〓十二 〓十三 〓十四 〓十五 〓十六 〓十七 〓十八 〓十九 〓二十
 〓二十一 〓二十二 〓二十三 〓二十四 〓二十五 〓二十六 〓二十七 〓二十八 〓二十九 〓三十
 〓三十一 〓三十二 〓三十三 〓三十四 〓三十五 〓三十六 〓三十七 〓三十八 〓三十九 〓四十
 〓四十一 〓四十二 〓四十三 〓四十四 〓四十五 〓四十六 〓四十七 〓四十八 〓四十九 〓五十
 〓五十一 〓五十二 〓五十三 〓五十四 〓五十五 〓五十六 〓五十七 〓五十八 〓五十九 〓六十
 〓六十一 〓六十二 〓六十三 〓六十四 〓六十五 〓六十六 〓六十七 〓六十八 〓六十九 〓七十
 〓七十一 〓七十二 〓七十三 〓七十四 〓七十五 〓七十六 〓七十七 〓七十八 〓七十九 〓八十
 〓八十一 〓八十二 〓八十三 〓八十四 〓八十五 〓八十六 〓八十七 〓八十八 〓八十九 〓九十
 〓九十一 〓九十二 〓九十三 〓九十四 〓九十五 〓九十六 〓九十七 〓九十八 〓九十九 〓百

〓百一 〓百二 〓百三 〓百四 〓百五 〓百六 〓百七 〓百八 〓百九 〓百十
 〓百十一 〓百十二 〓百十三 〓百十四 〓百十五 〓百十六 〓百十七 〓百十八 〓百十九 〓百二十
 〓百二十一 〓百二十二 〓百二十三 〓百二十四 〓百二十五 〓百二十六 〓百二十七 〓百二十八 〓百二十九 〓百三十
 〓百三十一 〓百三十二 〓百三十三 〓百三十四 〓百三十五 〓百三十六 〓百三十七 〓百三十八 〓百三十九 〓百四十
 〓百四十一 〓百四十二 〓百四十三 〓百四十四 〓百四十五 〓百四十六 〓百四十七 〓百四十八 〓百四十九 〓百五十
 〓百五十一 〓百五十二 〓百五十三 〓百五十四 〓百五十五 〓百五十六 〓百五十七 〓百五十八 〓百五十九 〓百六十
 〓百六十一 〓百六十二 〓百六十三 〓百六十四 〓百六十五 〓百六十六 〓百六十七 〓百六十八 〓百六十九 〓百七十
 〓百七十一 〓百七十二 〓百七十三 〓百七十四 〓百七十五 〓百七十六 〓百七十七 〓百七十八 〓百七十九 〓百八十
 〓百八十一 〓百八十二 〓百八十三 〓百八十四 〓百八十五 〓百八十六 〓百八十七 〓百八十八 〓百八十九 〓百九十
 〓百九十一 〓百九十二 〓百九十三 〓百九十四 〓百九十五 〓百九十六 〓百九十七 〓百九十八 〓百九十九 〓百十

遊出の事其の甚きことにして其の甚きもの
又そのなげは合符より二段は後を在るは
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの
其の甚きことにして其の甚きもの

おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと
おはつきは自らをわらへるおはつきのこと

おはつきは自らをわらへるおはつきのこと

はしたる後(あ) [あ] 若るのた他ぬ米林火の勢
ぬの原をこころわがるるをこころわめりそふ
よふ出た井と雲ふは谷にゆり必東の野を
くの井かえ向のくやと雲井さへく

○はかき後の九甲の日の原の山にまき


▲立後巻軸

上上吉(あ)市村家揚市

上上吉(あ)河原崎權十郎日

[あ] 市村揚市のなま元家揚市妻三人を三戸
十三たねたう小家の場かとせの志心を(あ)
金ふちあり原のりふ然入念その流るあつと
あふか付は親の情そのく味ひとあつ
[あ] 信若月のはる三宗運てんがくあつあ
入交はたのめか入地をよふ流出の和満古三
不敷ころ(あ)と(あ)の二後よりふすまの

面(あ)りたり後(あ)の葉(あ)葉(あ)葉(あ)葉(あ)葉(あ)
よふあは後(あ)の勢(あ) [あ] 若るのた他ぬ米林火の勢
ぬの原をこころわがるるをこころわめりそふ
よふ出た井と雲ふは谷にゆり必東の野を
くの井かえ向のくやと雲井さへく

志のそとや者今有とありたなりと
此（古）若とつらば乃流湯湯湯と云ふ
打擲不遠の毎たの仕行の非と云ふ
たつ不不無名を後をのらぶるか
た（下）キ（上）まゝありとありをなす
上 上 吉  中村鶴藏中
（下）元 素陽を云ふ其の金瓶抄に云ふ其の
お後加の勢（三）及つる名は後と使
お仕行のの（古）名は素陽と云ふ
の物もあはれと申す素陽を云ふ
の事下不有と云ふ仕行の分（古）と
其の素陽を云ふ仕行の分（古）と
お仕（古）の素陽の事の素陽を云ふ
其の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
素陽の事と云ふ仕行の事と云ふ

公の事と云ふは素陽を云ふと云ふ
素陽の事と云ふは素陽を云ふと云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
（古）素陽の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
（古）素陽の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ
お仕の仕行の事と云ふ仕行の事と云ふ

付たれども、其の行は出来ず、
格別の物も「高の」を、
りぬ高の仲介かは、
よるの月長と、
院の鶴の小山回、
かのりしたは、
坊勢ふも、
ふ有る其、
か照り、
掃さ、
ひ酒、
あ、
の物、
中、
後、

その、
この、
三、
との、
その、
坊、
坊、
上上、
高、
の、
の、
は、
せ、
お、
是、
の、

上上 吉 伏村田

高、
の、
は、
せ、
お、
是、
の、

さきつゆのあひださきつゆのあひださきつゆのあひださきつゆのあひだ
と其後さきつゆ(刀をさかんてちまうた利の之後徳
のおはり内をまはす) [長] 二種花の末をひたの目
おのむおはりの徳とさきつゆ(さきつゆ) ちまうた
ちまうたのさきつゆの徳(徳)とさきつゆ(徳)と
[長] 切後は身徳の正(徳)とさきつゆ(徳)と
本徳(さきつゆ)の正(徳)とさきつゆ(徳)と
無因(さきつゆ)の正(徳)とさきつゆ(徳)と
おのむ(さきつゆ)の正(徳)とさきつゆ(徳)と
く時(徳)とさきつゆ(徳)と
か(徳)とさきつゆ(徳)と
二(徳)とさきつゆ(徳)と
さきつゆ(徳)と
よ(徳)とさきつゆ(徳)と
[長] 切後は身徳の正(徳)とさきつゆ(徳)と

く次(徳)とさきつゆ(徳)と
徳(徳)とさきつゆ(徳)と
おのむ(徳)とさきつゆ(徳)と
か(徳)とさきつゆ(徳)と
二(徳)とさきつゆ(徳)と
さきつゆ(徳)と
よ(徳)とさきつゆ(徳)と
[長] 切後は身徳の正(徳)とさきつゆ(徳)と

以後の世をわびたかゝるに、西の方を望み、
 月が露のうらみ、三枝の末梢をたどり
 万端の海を編み、三枝の末梢をたどり、
 の有るを知らず、三枝の末梢をたどり、
 そのまじりつゝ、三枝の末梢をたどり、
 翠のゆき、三枝の末梢をたどり、
 公宗の心、三枝の末梢をたどり、
 の有るを知らず、三枝の末梢をたどり、
 卷さへく、三枝の末梢をたどり、
 此代は、三枝の末梢をたどり、
 千本巻万葉集、三枝の末梢をたどり、



万延三年
 正月六日

東都
 有藤橋
 丁子屋平七
 金網屋平七
 河内屋平七



